

原村の地域おこし協力隊が発行するかわらばんのことです。
原村で暮らす、おもしろくて素敵なお話を紹介します。



「八ヶ岳中央農業実践大学校 勤務」

伊東 麻紀さん（47）

東京都出身。製菓専門学校で学び、洋菓子店にパティシエとして就職。1年半後に妹と共にパン屋を開業する。食べ物を扱っている日々の中で、この食べ物が一体どこから来ているのか疑問を抱き始め、14年間経営してきたパン屋を妹に任せ、農業の道へ進むことを決意。八ヶ岳中央農業実践大学校へ入学後、同校へ就職し、現在は花苗を育てている。

11月よりシクラメンフェア開催。12月まで楽しめます。

自分のできる範囲で無理せず農業をやり、
自分だからできる生き方を模索していききたい

昔から食べ物が大好きだったと語る伊東さん。お店を構えてから毎日、手にする食材が一体どこから来ているのかと疑問を抱くようになったと言う。

「きっかけは震災でした。流通がマヒする中で、この食べ物はどこから私の元に届き、買ってくれたこの人はどこまで帰って行くのだろうか、と考えるようになりました。」と、食べ物のルーツに思いを馳せる中で、野菜を作っている現場『農業』へ興味を沸いてきた。高校時代の先輩（現在の夫）から、八ヶ岳中央農業実践大学校の存在を聞き、思い切って入学を決意。現在は同校に就職して花苗を育てている。「東京で暮らしていた頃、自然は自然はとよく耳にしていました。だけど農に携わり、やっと本当の意味で理解できたんです。自然が厳しいことも、自然を守りたい気持ちも。そして、自然に生かされているということも。」と話し、自然を敬い寄り添いながら生活をしている農家さんへの尊敬と、自然のリズムに身を委ねる生活の心地よさを語ってくれた。

農業で独立することは難しいと思われるが、ただ、誰でも自分のできる範囲で始められるということも多くの人に知ってもらいたいと話す伊東さん。「大規模な農業は無理でも、自分のできる範囲でやっていきたい。焦らずマイペースに、自分だからできる生き方を模索していきたいです。」と、都会では考えられなかった多様な生き方が原村では可能なのだということを教えてくれた。

経営者として攻めの姿勢で世の中に挑んできた伊東さんは「原村に移住してから、求められることに応えることの心地よさを実感しています。」と大きな笑顔を見せてくれた。環境に身を委ねることで、自分の気づけなかった新しい自分の扉が開かれてゆき、感性が研ぎ澄まされてゆく。それこそが原村の不思議な魅力なのだと教えてくれた。

農大の学生さんが可愛くて仕方ないと満面の笑みで話す伊東さん。笑顔の中に力強さを感じるその姿は、愛情に満ちた大きな心で作物を育てる大地のようだ。